

# 戦後社会福祉理論に持続する争点の深層論理についてのノート

## Notes on the Depth Logic of Continuing Controversial Points in Post-War Social Welfare Theories

松 田 眞 一

Shinichi MATSUDA

### 目 次

- I 戦後社会福祉理論に持続する争点と問題の限定
- II 対立する体系理論と争点の深層論理
  - 1 体系理論 1 (政策論)
    - (1) 孝橋理論のエッセンス
    - (2) 争点の深層論理
  - 2 体系理論 2 (技術論)
    - (1) 岡村理論のエッセンス
    - (2) 争点の深層論理
- III 戦後社会福祉理論に持続する争点の深層論理と課題

### I 戦後社会福祉理論に持続する争点と問題の限定

戦後社会福祉理論に持続する争点の意味は2つある。

1 つめの意味は何か。戦後社会福祉理論に持続する争点を一言でいえば、それは、やはり、社会福祉学という学問領域の争点らしく「社会福祉とは何か」が一貫する基本的テーマとしてあり続けてきた、ということになる<sup>1)</sup>。

今、ここから戦後社会福祉理論をみれば、それは、この基本的テーマが、戦後資本主義の変化にともなう国民生活の中で、いくつもの表情をみせてきた、とみることができる。今、時代背景の要因をひとまず措いて<sup>2)</sup>、この基本的テーマがとった表情に注目し、それに具体的な争点名を与えると、戦後社会福祉理論は、次のような個別争点＝表情の変化としてつかむことができるように思われる<sup>3)</sup>。すなわち、戦後社会福祉理論は、基本的テーマが、

① まず、社会福祉の「本質」如何<sup>4)</sup> (以下、争点1) という表情をみせた段階から、社会福祉の「構成」<sup>5)</sup> (以下、争点2) という表情をみせた段階へと変化し、

② かつ、争点2においても、争点1の表情が影を残しそういう意味では論理的関心の強い表情<sup>6)</sup>の局面から、現実的関心の強い表情<sup>7)</sup>の局面へと変化してきたように思われる。

③ そして現在、戦後社会福祉理論の争点は、この社会福祉の「構成」に関する強い現実的関心の中から、争点1・社会福祉の「本質」如何が、再び、しかし高次の次元で論理的関心をあつめはじめ、社会福祉の「総合 (全体像)」<sup>8)</sup> という新しい争点 (以下、争点3) の表情をみせはじめている

ように思われる。

したがって、現在、戦後社会福祉理論は、その基本的争点・「社会福祉とは何か」を、新しい表情で展開することを求められているとみていいだろう<sup>9)</sup>。

しかし、実は、戦後社会福祉理論には以上の個別争点の変化をとおして、起点の争点1（社会福祉の「本質」如何）が、その総括不十分のゆえに未整理のまま貫いている。それゆえ、争点1をめぐる議論は、どの段階、局面での表情にも影響を及ぼし、そこでの議論を混乱させてきた<sup>10)</sup>。戦後社会福祉理論に持続する争点の2つめの意味はこれである。

以下、小稿では、テーマ・戦後社会福祉理論に持続する争点を2つめの意味でとらえ、その深層論理を検討する。なぜなら、現在、「社会福祉とは何か」をめぐる新たな争点3の議論を生産的なものとするためにも、争点1に注目し、その総括・克服を困難にさせていると思われる深層レベルの論理を分析することが求められていると思われるからである<sup>11)</sup>。これが小稿の問題限定の意味であり、以下ではこれに次のようにアプローチする。争点1をめぐる議論は大きく政策論と技術論との間で行われた。戦後社会福祉理論における厳密な意味での体系理論は、通称、孝橋理論<sup>12)</sup>、岡村理論<sup>13)</sup>と呼ばれる2つであるが、この2つは相反する立場にたち、かつ、政策論と技術論を代表する<sup>14)</sup>。ゆえに以下、この2つの体系理論を素材とし、争点1の総括を困難にしている深層論理をそれぞれの側において分析する。

## II 対立する体系理論と争点の深層論理

### 1 体系理論1（政策論）

戦後社会福祉理論の基本的なテーマ・「社会福祉とは何か」をめぐる最初の争点は、社会福祉の「本質」如何であった。この争点1は、「政策論」にたつ孝橋正一から提起された。以下では、この孝橋の体系理論についてエッセンスをみ<sup>15)</sup>、続いて争点对立にかかわる深層論理の特徴を析出することにした。

#### (1) 孝橋理論のエッセンス

争点1・社会福祉の「本質」をめぐる孝橋の主張は、氏の体系理論のエッセンスを述べれば足りる。それは次のような論理過程をたどって獲得された。

まず、資本主義社会は、その構造から、必然的に社会的諸問題を産出する。そしてそれは、大きく、社会問題と社会的問題とにわかれる。

資本主義社会維持・存続の視点から、社会にとって基礎的・本質的課題をもつのは前者・社会問題で、具体的には労働問題を意味する。

労働問題は、労働条件をめぐる問題であり、とりわけ賃金の僅少性という資本主義的限界から、国民生活に、必然的に「社会的必要の不充足状態」を派生し続ける。これが社会的問題である。

資本主義国家は、資本主義社会維持のためにこれらの問題にそれぞれ対応する。すなわち、社会問題に対応する施策が社会政策であり、社会的問題に対応する施策が社会事業（以下、社会福祉）である。

では、これらの施策はどういう関係にあるか。それは問題の関係から導かれる。すなわち、資本主義社会は、社会問題（労働問題）を完全に解決する体制ではないから、社会的問題（社会的必要の不完全状態）はそこから常に派生し続けるものとしてある。したがって、社会福祉がその社会的問題に対応するとされるとき、社会福祉は、基底にある社会問題への対応策＝社会政策と一定の関係に入ることになる。すなわち、社会福祉は、客観的には、社会政策を補充する位置・性格をもち、

かつ、そのことをとおして資本主義社会を維持・存続させるという機能をもっている、と。

こうして、社会福祉は、資本主義社会を維持・存続させるための国家の政策の1つとしてあり、具体的には、社会政策との関連で、それを補充する位置・性格をもつ点に特質がある。

## (2) 争点の深層論理

さて、以上が孝橋の「社会福祉とは何か」の議論、すなわち社会福祉の「本質」論であり、ここから、氏が、それと異なる立場の社会福祉論（＝技術論）を厳しく批判することによって争点1が成立する。今、社会福祉の「技術論」とは、社会福祉を、ソーシャル・ワーク (social work)＝社会福祉の人間援助技術（＝援助活動）と同義でつかむ立場であり、アメリカ社会福祉論をその典型とする。孝橋は、社会福祉の「本質」を政策的形態にある、とする立場から、社会福祉を技術的形態としてつかむ議論および技術的形態のアメリカ社会福祉論を日本に移植せんとする議論を厳しく批判した<sup>16)</sup>。

今、結論を先どりすると、この孝橋の「本質＝政策」論が「技術論」との間に生みだした対立・分断は、氏の「政策」概念に2つの次元が含まれており、かつそれが未分化な形で内包されているところに起因するように思われる。以下、氏の「政策」概念に内在する論理問題を検討しよう。

まず、孝橋の「政策」の2次元は、いずれも、氏の論理中、社会福祉がまさに成立をみんとするところ、すなわち社会福祉は資本主義社会がうみだす社会的問題に対応する、とされるところから生じている。

① まず、孝橋において、社会福祉は社会的問題への対応策であり、それは一国の重要な政策たる社会政策との関連を保持していた。したがって、社会福祉も国の政策の1つであり、なかんずく社会政策を補充するものとして成立した。これが社会福祉の「本質」＝政策の1つめの次元を意味する（したがって、ここから孝橋においては社会福祉は援助技術というものではない、ということになる）。

② もう1つの政策次元はこの意味とは異なる。これは、社会福祉＝社会的問題への対応策を具体化する次元で見出される。すなわち、社会福祉が実際にどのように問題に対応するか、とみると、その対応のしかたは、基本的に、諸個人のもつ問題（社会的問題）の共通性部分を抽出し、それに平均的・一律的に対応する形をとる。したがって、社会福祉＝政策の意味は、ここでは問題への制度的対応の意となり、政策は、通常、制度・政策と称される場合のものにあたる。これが社会福祉＝政策の2つめの次元にあたる。

以上から、孝橋理論において社会的問題への対応策を社会福祉とし、その本質を政策とした場合、そこには2つの次元①、②が内在している。今それを図式化すると図1のようになる。そしてそれをさらに図2のように図式化すると、政策の2次元がどのような関係になっているかがより明

図1 孝橋の社会福祉＝政策の2次元

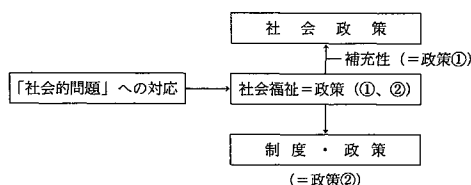
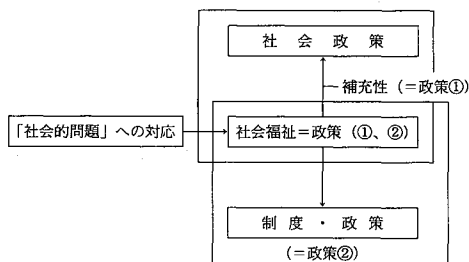


図2 孝橋の社会福祉＝政策の2次元



らかとなる。

すなわち、上図において、社会福祉の「本質」=政策を、政策①の次元でとらえたものは、社会福祉の「本質」を、いわば社会福祉の外的側面で規定したものにあたり（社会福祉=社会政策の補充策）、政策②の次元でとらえたものは、社会福祉の「本質」を、いわば社会福祉の内的側面で規定したものに当たる（社会福祉=制度・政策）。

しかし、氏において、この2つの次元の存在および関係は対自化・客観化されていない。したがって、その社会福祉「本質」論は、「政策」2次元を、未分化に内包=混同した「本質」論となる。ゆえに、争点1・社会福祉の「本質」如何をめぐり、相互の議論がこのレベルにまでおりてくると、この未分化論理では自己の議論のみならず他者の議論についても論点の次元を把握することが困難となり、議論は錯綜する。この、社会福祉の「本質」=政策における2次元の未分化論理が、「政策論」孝橋サイドの争点の深層論理の特徴とみてよいだろう。

## 2 体系理論2（技術論）

### (1) 岡村理論のエッセンス

戦後社会福祉理論において、「政策論」孝橋の体系理論に匹敵するものを提起しているのは岡村重夫であり、かつ、その主張内容において正反対に位置するのも岡村重夫である。孝橋のいう社会福祉の「本質」は、岡村においては「固有性」となり、孝橋のいう「政策」は、岡村においては「技術、正確には援助活動（以下、援助活動とする）」<sup>17)</sup>となる。すなわち、「政策論」の「本質=政策」は、岡村においては「固有性=援助活動」となる。

2つの体系理論は対立している。しかし一方で次のような類似点もみられる。つまり両者は、理論構成の大枠の点で意外に類似している。すなわち岡村も、資本主義社会（ただし氏は高度分業社会の側面に重点をおいてみている）は様々な生活諸困難・問題をうみだすとし、それに対応するものとして大きく2つの施策をもちだす。1つは一般施策<sup>18)</sup>であり、もう1つが社会福祉である。ここから岡村においても、社会福祉は、他施策（一般施策）との関係に入るから、そこにおいて社会福祉がどのような位置・性格にあるかがうかびあがる。岡村の社会福祉の「本質」（固有性）はこうして析出される<sup>19)</sup>。もちろん以上は岡村理論を結果からみた上でのことで、その「固有性」が追求される論理過程は孝橋とは大いに異なる。以下、岡村理論のエッセンスをみることにする（独特な分、孝橋と違って注を付すことにする）。

岡村によれば、社会福祉でいう生活<sup>20)</sup>とは、人間が「基本的社会制度」<sup>21)</sup>（7種類ある。以下、社会制度ないし制度とする。現実の諸施策・政策はその社会制度の具体的発現とされるのでこれも7分野にわかれる。これら7分野を一括したものは通称、一般施策と呼ばれる）を利用して、「基本的要求」<sup>22)</sup>（7種類ある。以下、ニードとする）を充足することを意味する。岡村はこの人間と社会制度との関係を「社会関係」と規定するから、生活とは、ひとまず「社会関係」の全体（7つの合計）といえる。

今、この「社会関係」は、そのつかみ方から分析的に2側面（「客体的側面」と「主体的側面」）でとらえられる。まず、人間はニードをみたすためには社会制度（一般施策）を利用しなければならない。しかしそのとき、制度から人間に対して一定の役割期待が課せられる。これが「社会関係の客体的側面」<sup>23)</sup>である。ここから人間が実際にニードをみたそうとすれば、この役割期待にそって社会制度に応答（役割実行）<sup>24)</sup>しなければならない。これが「社会関係の主体的側面」<sup>25)</sup>である。

ところで岡村によれば、諸制度（一般施策）は、本来、相互に無関係に存在しており、かつ制度は人間のニードに対し一律的・画一的に対応する<sup>26)</sup>ので（「客体的側面」）、諸制度を利用してニードをみたさなければならない現代人の生活は、ニードをみたす過程で必然的に役割葛藤をもたされ、

かつモノ化・部品化される<sup>27)</sup>。ゆえに現代社会（高度分業社会）では、すべての人間がこのような「特自な生活困難・問題」<sup>28)</sup>に直面する。

こうしてここに社会福祉が登場する。すなわち、岡村によれば、社会福祉は、「社会関係の主体的側面」を重視・注目する立場<sup>29)</sup>から、他の制度・一般施策がとりあげることのないこの「独自な生活困難・問題」を対象とし、その解決を援助する活動である、と<sup>30)</sup>。

## (2) 争点の深層論理

### a 分化されている「本質」の2次元

争点1・社会福祉の「本質」をめぐる岡村の議論をみたが、岡村の「本質（固有性）＝援助活動」にも、孝橋同様、2次元がみられる。しかし、孝橋と異なり岡村は、2次元を対自化・分化しえている<sup>31)</sup>。

まず、岡村の「援助活動」の2次元も、孝橋同様、いずれも、社会福祉がまさに成立せんとするところ、すなわち、社会がうみ出す「独自生活問題」に対応するところから生じている。

① 1つめの次元の意味はどういうものか。岡村において、社会福祉は、「独自生活問題」への対応策＝援助活動であった。それは、論理過程の出発点において、他施策（一般施策）との関係からとらえられたから、岡村の社会福祉＝援助活動は「独自生活問題」への対応をもって一般施策を補充する性格・位置にある。これが、「援助活動」の1つめの次元にあたる。

② 「援助活動」の2つめの次元はこれとは異なる。社会福祉が「独自生活問題」への対応策である、というところまでは同じであるが、その対応の具体化は、基本的に、諸個人のもつ問題（「独自生活問題」）の共通性部分を抽出し、それに平均的・一律的に対応する形をとるから、社会福祉は、ここでは問題に制度的に対応するものとなる。したがって、この場合の社会福祉は、通常、制度・政策と称されるものに等しい。これが、岡村の社会福祉＝「援助活動」の2つめの次元にあたる。

このように、岡村理論において、「独自生活問題」への対応策を社会福祉とし、その「本質」を「援助活動」とした場合、そこには、孝橋同様、2つの次元（①・②）が存在している（図－3）。しかし、岡村においては、この「援助活動」の2次元は、孝橋の「政策」2次元の未分化な状態と異なり、対自化・客観化されている。つまり岡村の「援助活動」の2次元は論理的に分化されており、混同されていない<sup>32)</sup>（図－4）。

図3 岡村の社会福祉＝援助活動の2次元

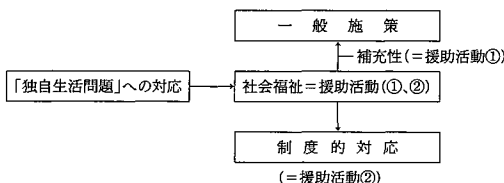
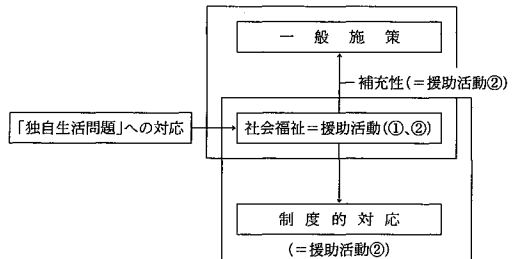


図4 岡村の社会福祉＝援助活動の2次元



### b 分化されていない「本質」の2次元

しかし、実は、岡村にはもう1つの2次元問題が伏在している。すなわち、岡村においては、上にみた意味での「援助活動」の2次元は分化されているのだが、それ（「援助活動」の2次元）が「政策」との間でもつ関係については、残念ながら未分化状態にとどまっている。では、この意味での「援助活動」の2次元とはどのようなものか。

①' まず「援助活動」の1つめの次元からみよう。

岡村の「援助活動①次元」は、一般施策を補充するものとしてあった。そして補充するものの内容は確かに「援助活動」であるから、その限り、それは「政策」ではない。しかし、その「援助活動」は、客観的には、一般施策という政策を補充するものとしてある。つまり岡村の社会福祉は、「援助活動」という内容をもちつつ、丁度、孝橋の「政策①」と同じ次元のものとしてあることになる。ゆえに、岡村の社会福祉＝「援助活動①次元」は、その中身（「援助活動」）からみて、現象的には「政策」であるとはみえないものの、本質的には「政策①次元」にあたるものとして存在している。

②' 「援助活動」の2つめの次元はどのようなものか。「援助活動②次元」は、「独自生活問題」の共通性部分に対応するものとしてあった。そして対応するものの中身は「援助活動」であったから、その限りでは「政策」というものではない。しかし、その「援助活動」は、客観的には、問題への制度的対応（制度・政策）としてある。つまり岡村の社会福祉は、「援助活動」という内容をもちつつ、丁度、孝橋の「政策②」と同じ次元のものとしてあることになる。ゆえに、岡村の社会福祉＝「援助活動②次元」は、その中身（「援助活動」）からみて、現象的には「政策」であるとはみえないものの、本質的には「政策②次元」にあたるものとして存在している。

c まとめ

以上a, bから、岡村の社会福祉について2つのことがいえよう。

① aから、その「本質」（固有性）＝「援助活動」は、2次元を内包し、かつ2次元そのものは、孝橋と違って論理的に分化されており、混同されていない。

② しかし、bから、その「援助活動」（の2次元）が、実は、そういう内容をもった「政策」（の2次元）であることについては、論理的に分化されていない。すなわち、岡村理論は、「援助活動」と「政策」との関係において未分化状態にある。

したがって、争点1・社会福祉の「本質」如何をめぐり、相互の議論が、そのレベルにまでおりてくると、その未分化論理では、自己の議論のみならず他者の議論についても、論点の次元を把握することが困難となり、議論は錯綜する。

この「援助活動」（2次元）と「政策」（2次元）との区別および関連を対自化・客観化するにいたっていない論理＝未分化論理が、「技術論」岡村サイドの争点の深層論理の特徴とみてよいだろう。

### III 戦後社会福祉論に持続する争点の深層論理と課題

以上、争点1・社会福祉の「本質」－「政策」、技術（援助活動）－をめぐり、2つの体系理論－「政策論」（孝橋理論）、「技術論」（岡村理論）－をみてきた。今、争点1をめぐるそれぞれの深層論理をまとめると、次のようになる。

① 争点1・社会福祉の「本質」をめぐり、「政策論」（孝橋理論）は、その社会福祉の「本質」＝「政策」について2次元（①・②）を論理的に分化しえていない。したがって争点をめぐる議論がこのレベルにまでおりてくるとその未分化・混同ゆえに議論は錯綜し、混迷・分断の相をおびる。

② 争点1・社会福祉の「本質」をめぐり、「技術論」（岡村理論）は、その社会福祉の「本質（固有性）」＝「援助活動」について2次元（①、②）を分化しえている。しかし、「援助活動」と「政策」との関係については2次元（①・②'）を分化しえていない。したがって争点をめぐる議論がこのレベルにまでおりてくると、その未分化・混同ゆえに議論は錯綜し、混迷・分断の相をおびる。

③ 以上から、戦後社会福祉理論における2つの体系理論のうち、「本質」の2次元を分化しえていない「政策論」（孝橋理論）もさることながら（こちらの方はまだどちらかといえば単純である）、

むしろ「本質」の2次元を分化しえている「技術論」(岡村理論)の議論の方に、1つの疑問がうかびあがる。それは、「援助活動」と「政策」との関係(①・②)が未分化にとどまっていた問題にかかわる。

まず、岡村は、「政策」は社会福祉の「本質」(固有性)ではない<sup>33)</sup>、として「政策論」を批判し、「援助活動」を「本質」としたのだが、今、その「援助活動」が本質的に「政策」に等しいとなると、岡村の議論には明らかに論理矛盾が存在することになる。ここには、次のような疑問が可能になる。すなわち、岡村は「政策論」を批判し、「援助活動」を社会福祉の「本質」としたのだが、そのとき、それを導き出した論理過程に、はたして必然性が確保されていたのだろうか、と。これを逆にいえば、岡村は「政策論」を批判しつつも、尚かつそこで「政策」を社会福祉の「本質」として追求し、「政策」に「固有性」を見出すことはできなかったのか、と。実は、その論理の不徹底さゆえに「援助活動」と「政策」の関係に不分明さが生じ未分化状態になるのではないだろうか。ここに、岡村社会福祉の「固有性」論に論理的必然性が存在するか、という問題が成立する。

戦後社会福祉理論に持続する争点1をめぐる、2つの対立する体系理論をみてきたが、それをとおして気づくことは、これまで、この③の問題・論点が、析出されることなく、したがって未解決に残されてきた、ということである。したがって、戦後社会福祉理論において、これが残る限り、基本的な争点・「社会福祉とは何か」の個々の争点も対立・混迷を続けるように思われる。我々は、この③の問題・論点を、とりくむべき一課題として確認する必要を感じている<sup>34)</sup>。

## 注

- 1) 例えば、真田は編『戦後社会福祉論争』法律文化社、1979年を参照されたい。
- 2) 本来ならば「時代背景の要因を措いて」はならない。小稿が「ひとまず措いた」のは、小稿の問題意識が「争点の深層論理」にあり、その意味では争点の論理形式に分析のウエイトがおかれることになることとみただけである。
- 3) 戦後社会福祉理論を史的に把握せんとしたものをあげ、それとの対比で小稿の立場にふれておく。  
一番ヶ瀬康子「戦後社会事業論史研究序説——試論として——」『社会福祉学』(日本社会福祉学会)第6号、1965年。  
拙稿「戦後社会福祉論史」野久尾徳美・真田は編『現代社会福祉論』法律文化社、1973年。  
吉田久一『社会事業理論の歴史』一粒社、1974年。  
これらのものに対し、小稿が以下におこなうスケッチは、争点をピックアップし、その相互関連の連鎖を単純化してつかむことで、理論史をスケッチせんとしたものである。
- 4) 一般にこれは社会福祉本質論争とよばれる。これは、1952年から1953年にかけて、雑誌『大阪社会福祉研究』(大阪社会福祉協議会)誌上でおこなわれた。参加した論者、論文のリスト、論争の段階、論争全体についてのコメント、等については、拙稿「社会福祉本質論争」(真田は編『戦後日本社会福祉論争』法律文化社、1979年、所収)を参照されたい。
- 5) これについては、すぐあとの②で述べるので、そこでの注6)、7)を参照のこと。
- 6) これは例えば医療社会事業論争にみることができる。これは、1965年に、『医療と福祉』(日本医療社会事業協会編)誌上でおこなわれた。そこでは、社会福祉が、その構成要素の政策と技術の関係を問う形で論じられた。孝橋正一と仲村優一の間の議論は、さらに政策に規定された技術の内実を問う議論にすすんだ。
- 7) これは例えば福祉労働論にみることができる。ここでも社会福祉が、その構成要素の政策と技術の関係を中心に論じられ、政策と技術は福祉労働によって統一されるとする方向が提起された。  
野久尾徳美・真田は編『現代社会福祉論』法律文化社、1973年における真田論文、真田は編『社会福祉労働』法律文化社、1975年、等を参照のこと。
- 8) この争点について、問題提起の位置をしめていると思われる論稿に、松井二郎「社会福祉理論の体系化をめざして—諸理論の検討—」『社会福祉研究』、鉄道弘済会、1979年がある。他に拙稿「戦後社会福祉理論分野の基本的構図」『高知女子大学紀要(人文・社会科学編)』第32巻、1984年。

ただし松井がいつている体系化の意味は、我々のいう総合（対立する立場の）の意味ではなく、対立する立場・系譜のそれぞれにおいて理論の体系化をめざそうという意味である。この松井論文についてコメントを与えたことがある。拙稿「社会福祉理論分野におけるパラダイムの論議について（一）松井二郎氏の論稿を素材として」『高知女子大学紀要（人文・社会科学編）』第33巻，1985年。

- 9) 目下、社会福祉の「総合（全体像）」について、そのイメージは異なるが、以下のものをあげておく。  
三浦文夫『社会福祉経営論序説』碩文社，1980年。同『社会福祉政策研究』全国社会福祉協議会，1985年（現在，増補版が出ている）。

真田は「『総合』の意味」『総合社会福祉研究』（総合社会福祉研究所）創刊号，1989年，同「『社会福祉とは何か』の今日的意義」『総合福祉研究』（総合社会福祉研究所）第2号，1990年。

拙稿「社会福祉とは何か」河合幸尾，宮田明編『社会福祉と主体形成』法律文化社，1991年。

- 10) この争点1をめぐる議論は長期にわたり対立・分断を示してきたので，争点1は，戦後社会福祉理論において混迷・混乱の印象とともにある。この印象を表明しているものは多い。

- 11) この争点1にかかわって筆者もいくつかコメントを発表してきたが，自分の総括の仕事も含めて，これまでの総括を全体としていえば，異なる立場の緊張関係を深層論理の次元でとらえる視点が弱かったように思う。近年の総括は三浦文夫に代表されるが，氏の議論もその点では表層的であるように思われる。この視点と以下の分析は我々のオリジナルである。尚，三浦の総括については，注9)文献参照。他に，三友雅夫，坂田周一も三浦と同様の趣旨になっている（文献省略）。

- 12) 孝橋正一の体系理論としては次のものがある。まず，中心をなすものは，『社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房，1957年，『全訂 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房，1962年，であり，それに基づき，諸多の理論を批判したものとしては，『続 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房，1973年，『現代資本主義と社会事業』ミネルヴァ書房，1977年がある。

- 13) 岡村重夫の体系理論としては次のものがある。まず，中心をなすものは，『社会福祉学（総論）』柴田書店，1958年，『全訂 社会福祉学（総論）』柴田書店，1968年，である。しかし現在，これについては絶版宣言がなされ，これにかわるものとして『社会福祉原論』全国社会福祉協議会，1983年が出されている。

- 14) 岡村理論を，「技術論」を代表させてとらえることについて一言ふれる。すでに本質論争において明らかなように，孝橋が批判の対象とした「技術論」の原型は社会福祉を援助技術＝ソーシャルワークとしてとらえるものを意味した（後述，II-1-(2)争点の深層論理，参照）。岡村理論も社会福祉を，その実質においてソーシャルワークととらえている。ただ正確を期せば，ソーシャルワーク論というよりもソーシャルワークのための論としてある。すなわちそこでは，社会福祉を援助活動としてとらえ，その援助活動によって援助技術が位置づけられる。したがって岡村理論を「技術論」としてとらえるとき，より正確には「援助活動論」とする方が妥当といえる。

したがって一般に社会福祉の「政策論」「技術論」という対比から，「政策」に対するものとして「技術」がいわれるとき，岡村においてはそれはやや適切さを欠くきらいがある。ゆえに岡村理論については，孝橋的いい方である社会福祉の本質＝「技術」（本文3ページ，II-1-(2)参照）よりも「援助活動」（本文4ページ，II-2-(1)参照）の方が正確さを増す。

ともかく，岡村理論は現在も社会福祉援助技術論において，とりわけ技術の対象に関する議論において重要な位置をしめており，岡村理論を大きく「技術論」とみることに支障はない（例えば，岡本民夫・小田兼三編『社会福祉援助技術総論』ミネルヴァ書房，1990年，における「第2章・3 社会福祉援助技術の構造と具体的例示」（大島侑の論稿）をみよ）。ゆえに我々は岡村の『社会福祉原論』（注13）を『ソーシャルワーク原論』であるととらえる（拙稿，注34参照）。

- 15) 注12) 文献中の『全訂 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房，第2版による。

- 16) さかのぼって注14も参照されたい。なお，アメリカ社会福祉論の移植をめぐる孝橋の議論には矛盾がみられる。それに注目し孝橋の「本質」概念を批判的に分析したことがある。拙稿「戦後社会福祉理論分野の基本的構図」『高知女子大学紀要（人文・社会科学編）』第32巻，1984年。

- 17) 注14) 参照。

- 18) 岡村の一般施策を説明するためには，前提として通常一般施策についてなされる議論をみておく必要がある。たとえば仲村優一は，一般施策として次のようなものをあげる。「……所得保障（年金等），医療，教育，住宅，雇用，司法等の一般施策……」（『社会福祉概論』誠信書房，1984年，18頁）。これらの施策が「一般」と称されることについては，「それらの施策が国民生活の各領域で国民のニーズに一般的・平均的に対応するという特徴をもつことによる。今，この特徴をニーズが属する生活諸領域の方に注目してしぼり直すと，一般施策は総体として『国民の生活全体への対応策・サービス』ととらえることができる」（拙稿，注34）文献，48ページ）。諸領域は，生存権を守り実現するための領域



としてとらえられる。古川孝順は領域の数を7つあげている(一番ヶ瀬康子編『児童福祉論』有斐閣, 1974年, 92ページ)。

岡村も領域を7つでとらえる。しかし、岡村の場合、7つの領域はまず、「社会と個人の同時存続のために社会の側が内包する7つの基本的社会制度」としてとらえられ、この制度の具体的発現として一般施策がとらえられる。これが岡村の一般施策であり、結果的には他と共通性を示すが過程的には異なっている。尚、岡村における基本的社会制度とそれの具体的発現である一般施策との対応例については注21) 参照。

- 19) この固有性を析出するにあたっての岡村の問題意識をみておこう。そこには岡村の体系理論の構成が大枠で以上のような特徴になることがみてとれる。

「社会福祉固有の対象や機能を明確にしたいというわれわれの問題意識からいえば、社会保障、医療、教育、公衆衛生等のように、すでにそれぞれ固有の機能をもった社会制度には属さないで、しかもそれがなければ社会成員の生活が困難になるような社会的サービスは何か、ということが問題なのである。」(岡村, 注13) 前掲書, 56ページ)。

- 20) 生活を恣意的なイメージにまかせると、社会福祉が対象とする生活問題を明確に規定することはできない。したがってまず生活そのものを厳密に規定することからはじめなければならない。岡村はそれを以下のようにして獲得しようとする(岡村, 前掲書, 95~96ページ)。

- 21) 基本的社会制度は、岡村によれば7つあり、それは以下の図式の左側にあたる。右側のものは、その具体的発現としての制度・施策(一般施策)を示す(岡村, 前掲書, 85ページ)。

- a. 経済的安定⇔産業・経済, 社会保障制度
- b. 職業的安定⇔職業安定制度, 失業保険
- c. 医療の機会⇔医療・保健・衛生制度
- d. 家族的安定⇔家庭, 住宅制度
- e. 教育の機会⇔学校教育, 社会教育
- f. 社会的協同⇔司法, 道徳, 地域社会
- g. 文化・娯楽の機会⇔文化・娯楽制度

- 22) 基本的社会制度7つに対応して、個人の側でも基本的要求は7つある。

- 23) 岡村, 前掲書, 88ページ。

- 24) 役割実行は岡村の用語である。一般には役割遂行が使われる。

- 25) 岡村, 前掲書, 89ページ。

- 26) 同上, 88, 89, 131ページ。

- 27) 同上, 89, 131ページ。

- 28) 同上, 95~96ページ。これが、岡村の社会福祉が対象とするものの第一段階の規定である。厳密な対象規定は、次の3類型で表現される。①社会関係の不調和, ②社会関係の欠損, ③社会制度の欠陥(岡村, 同上, 104~113ページ)。

- 29) これが岡村の社会福祉の「固有の視点」といわれるものにあたる。

- 30) しかし、以上は、岡村の社会福祉を、成立の論理を中心にみたものであるから、まだ社会福祉のイメージは明らかではない。そこで次に、その社会福祉=「独自生活問題解決の援助活動」が具体的にどのように行われるかをみることにしよう。それによって岡村の社会福祉イメージが明らかになる。

まず、援助活動において大切なことは、「主体的側面」において、個人がもつ「社会関係」のすべてを視野にいれて援助しなければならない、とされる点である。なぜなら、社会福祉を根拠づける「社会関係の主体的側面は個人のもつ社会関係の全体を集中的に表現したものであり、それ自身が複数的・全体統合的である」(岡村, 前掲書, 98ページ)からである。それゆえに、この「主体的側面」に視点をすえて諸制度利用にともなう「独自問題」の解決を援助するとき、当然、「主体的側面」において、当該個人のニード充足にかかわるすべての諸制度(一般施策)を個人において「調整・統合」(89, 97ページ)する方向にすすみ、結果的に諸制度が個人に即して「全体的に関連づけ」(98ページ)られる形となる(結果としてニード充足がもたらされる)。

社会福祉が、社会生活における「独自生活問題」の「解決を援助する活動」である、といった場合、その具体的イメージはひとまずこういうことになる。

ところで、このような内容をもつ社会福祉は、孝橋同様、岡村においても、他施策(一般施策)との関連でとらえられた。ここから孝橋同様、岡村の社会福祉も一般施策を補充する位置・性格にあるものとなる。そのさい、岡村の補充性は次のような意味になる。

すなわち、社会福祉は、その「独自問題」の「解決の援助活動」をとおして、諸制度（一般施策）を「主体的側面」において調整・統合する機能をはたすから、ここに「専門的に分化した社会制度や施策の陥りがちな画一的処遇や人間の部品化的取りあつかいをやめさせることができ」（131ページ）、結論として「社会福祉の援助」は、「制度による人間支配や専門化的近視眼による人間の部品化をなくす防波堤として…一般的社会制度や施策を補完するのである」（131ページ）と。

しかし、岡村は、社会福祉のイメージを、この補充性においてよりも、補充性を可能にした「援助活動」に重点をおいてみているから、岡村の社会福祉の「固有性」は「独自生活問題」に対応する「援助活動」にある。

31) そのことは岡村の問題意識からも十分推測されることであるが（注19）参照）、より明確には、旧稿の叙述にそれが明示されている（『全訂 社会福祉学（総論）』柴田書店、1968年、138ページ。注13）参照。

32) 同上。

33) 岡村、前掲書、「第1章 社会福祉の発展」における「3—(3)社会福祉の拡大—福祉国家」および「3—(4)社会福祉の限定—現代の社会福祉」参照。

34) 筆者は、小稿におけるような問題意識からではなかったが、岡村の社会福祉の「本質」=「固有性」追求の内的論理に疑問を提起し、かつ批判的検討を加えてきた。次のものを参照されたい。拙稿「社会福祉とは何か」河合・宮田編、前掲書（注9文献）、所収。

（社会学研究室）

[付記] 前号論文の次の箇所を訂正させて頂く。

「戦後社会福祉理論整理のための1視点と若干の作業」中の「I はじめに」の8行目、注21)文献（近刊）を、注22)文献（近刊）へと訂正する。

「現代日本の低所得層対策における貧困視点について」中の「IVおわりに」の1行目、「現代日本における低所得層対策における貧困視点」を、「現代日本の低所得層対策における貧困視点」へと訂正する。